

琉球方言・九州西岸方言の音調体系をめぐって

崎 村 弘 文

On the Prosodical Systems of Ryūkyū Dialects and Kyūshū West Coast Dialects

Hirofumi SAKIMURA

【要旨】(4. まとめ参照。)

【キーワード】名義抄式、高起式低起式、方言区画

0. はじめに

0-1 標記のことがらについては、拙著『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』2006の中でやや詳しく触れたところであるが、同書刊行後いろいろと補足すべき点があることに気付き本稿をものした次第である。その主なところは、1) 例えば2拍語が5型である体系よりも複雑な音調体系(それが9型であるような)を上記の諸方言は経て変化して行ったか否か、2) 上記諸方言はいずれも3型の音調体系(語声調体系)から変化したものと考えられるが、その後の変化によってどのような特徴を持った音調体系に落ち着こうとしているのか、3) 琉球方言と九州方言との間には日本語諸方言に関する区画線の中で最大のそれが横たわっているとされるが、それはこの音調体系の問題をめぐってもそのまま認めることが許されるか、といったところである。それぞれに、関連する多くの問題を抱えることがらであるが、以下、出来るだけ簡潔にそれらについて考察を加えて行きたいと思う。

1. 琉球・九州西岸諸方言が経過した音調体系について

1-1 小松英雄氏が平声軽点の確認によって、平安末期畿内方言の1拍・2拍名詞の音調体系を次の如く想定されたのは著名な事実である(小松1971)。

1拍名詞

- . . . 子・身
- ⦿ . . . 名・日
- . . . 木・手
- ⦿ . . . 巢・齒

2拍名詞

- | | | |
|---------------|--------------|--------------|
| ●● . . . 篋波古 | ●○ . . . 梯波之 | ○○ . . . 髪加美 |
| ○● . . . 船舶布祢 | ○⦿ . . . 虻安父 | ●⦿ . . . 溝ミゾ |
| ⦿○ . . . 虹尔自 | ⦿● . . . 象キサ | ⦿○ . . . 脛ハギ |

1 拍名詞に4種類、2 拍名詞に9種類の調類が認められるということである（拍数を n とすれば調類の数は $5n-1$ で表わされるか。であれば、3 拍語では14種類の調類が認められるものと見込まれる）。甚だ複雑な音調体系であるが、果たしてこのような音調体系を経て琉球諸方言や九州西岸諸方言は変化して行ったものであろうか。

筆者には、どうもそのようには思われない。語声調方言の中で最も複雑な体系を持つものと目される香川県佐柳島方言の音調体系ですら5型がせいぜいであり、琉球・九州西岸の諸方言は、いずれもそれより簡素な3型の音調体系を基としていることが推測されるからである。九州東北部に認められるアクセント方言の2拍名詞音調の体系も、最も複雑なもので12類/3類/45類の3型であり、九州以西の諸方言の音調体系にはそれより複雑なものは認められないと考えられるのである。

事は日本語諸方言全体の音調体系の歴史にも関わる問題であるように思われるが、ここではそれについての言及は避け、琉球・九州西岸諸方言の音調体系が図1～4の如く3型を祖型として全て問題無く一つの系譜関係にまとめられることを確認しておきたいと思う。3型から遡れば、5型のいわゆる名義抄式体系にまでは或いは行き着くかもしれないが、小松氏が示されたようなところにはまではたどり着かないのではないか。小松氏が提示された体系は現代京阪方言などの祖型でこそあれ、九州以西の諸方言の祖型であるかどうかは慎重に考慮しなければならないと思うのである（2拍名詞12類/3類/45類の3型音調体系から同5型の音調体系が生じたと考える研究者も少なくないことは今措く）。

2. 琉球・九州西岸諸方言が落ち着こうとしている音調体系について

2-1 1で見た如く、琉球・九州西岸諸方言はいずれも3型の音調体系（語声調体系）から変化したものと考えられるのであるが、さまざまな変化を経てどのような音調体系に落ち着こうとしているのであろうか。

図1・図2から明らかな如く、琉球において12類/3類/45類の区別から12類/345類の区別に変化した諸方言は、今里系の中では須古式を除きほぼ12類＝高起式、345類＝低起式に、鳩間系の中では真栄里式・仲筋式・玻座間式・前式・川平式および石川式を除き、より変化の進んだものほど同様に（石川式は再転）、落ち着こうとしているように窺われる。123類/45類の区別に変化した諸方言は、名瀬系の中では名瀬式・花良治式・戸口式・知名瀬式を除き、より変化の進んだものほど123類＝高起式、45類＝低起式に、大浦系の中では狩俣式・与那覇式を除き、より変化の進んだものほど同様に、落ち着こうとしているように窺われる。宮里式は例外と見るべきか。また、1245類/3類の区別に変化した伊江式・田皆式は、1245類＝高起式、3類＝低起式に落ち着こうとしているように窺われる（即ち、全体として、12類およびそれと合併した類が高起式、それ以外が低起式に落ち着こうとしているように窺われる）。

なお、3型を保っている諸方言の動向なども見なければならないと思うが、全般にいわゆる名義抄式の段階で高起式であった語を高起式に、低起式であった語を低起式にしようとする傾向が、変化の途上での高起低起の逆転は有ったにせよ、見て取れる。

2-2 図3・図4に見る如く、九州西岸においては諸方言はいずれも12類/345類の区別に変化しているが、ほぼ全て、12類＝高起式、345類＝低起式、に落ち着いていると言って

良い。ただし、豊前式からの変化の過程でやはり高起低起の逆転は有ったもののようである。傾向としては、琉球におけると同様に、いわゆる名義抄式の段階で高起式であった語を高起式に、低起式であった語を低起式にしようとするものであるということである。

以上から云えることは、琉球・九州西岸の諸方言においてそれらが落ち着こうとしている音調体系は、いわゆる名義抄式の高起式の語を高起式に、低起式の語を低起式にしたものであるということである。これは、J.D. McCawley が徳川宗賢1962の英訳1972の注の中で述べたとされるく西九州の第4次アクセント [二つの弁別的声調が有る段階] は、……第1次アクセント [11世紀の京都方言の段階] から、音韻推移によって直接出て来たのではないか>という見解をそのまま受け入れることは出来ないにせよ、その2つの音調体系を結び付ける発想が必ずしも外的外れではないことを示す事実と云って良からう。

3. 琉球諸方言と九州西岸諸方言との方言区画をめぐって

3-1 さて、こうなって来ると、音調体系に関しては琉球・九州西岸両諸方言はきわめて高い共通性を持ったものということになって来るが、従來說えられて来た両方言間に横たわる巨大な方言区画線が存在はどのように扱えば良いことになるのであろうか。これについて筆者は、次のような先学の指摘を重視したい。

琉球方言と九州諸方言とのこのような類似が、両方言がそれぞれ琉球列島と九州とに定着して以後の、一方から他方への借用による類似によってのみ起こったとは考えられない。両方言の類似はもっと根の深いもののように見える。あるいは琉球方言と本土方言の分岐後、前者が少なくとも九州で用いられ、現在の九州諸方言の基層 (substratum) の形成にあずかったというようなことが考えられなくはない。

国立国語研究所1963「解説編」に見える語彙の類似をめぐる指摘であるが、両方言のつながりを大胆に想定していて興味深い。

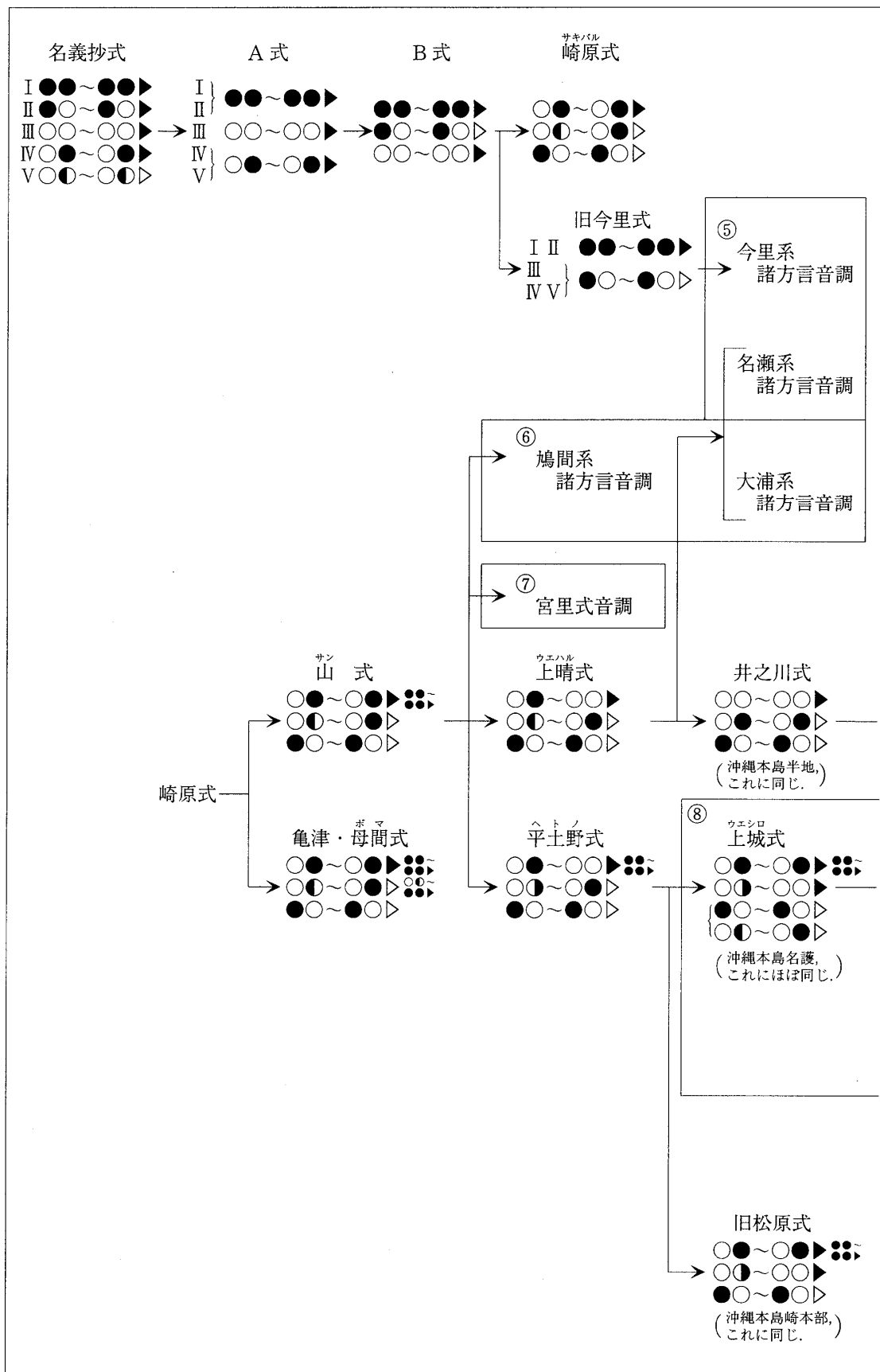
筆者はこの指摘を全くそのままに認めようとするものではないが、両方言のつながりに従來說かれて来た巨大な方言区画線を越える根深い共通性の有る旨のそれに賛同の意を表したいと思うのである。その背景となった人や文化の交流については、拙著「綜合篇」にやや詳しく触れたところでもあるが、再論すれば、非常に古くから朝鮮半島西岸・九州西岸・琉球北部を結ぶ交流関係が有ったところに、弥生時代下って中国上海付近からの漂海民の活動の影響が言語傍層のそれとして有り、それら地域に今日見られるような音調の面での共通性 (3型を祖型とする語声調体系を持つ) が認められる結果をもたらしたということである。区画線を消すべきほどではないにしても、両方言間に見られる共通性にはもっと目が向けられて良いと思われる。

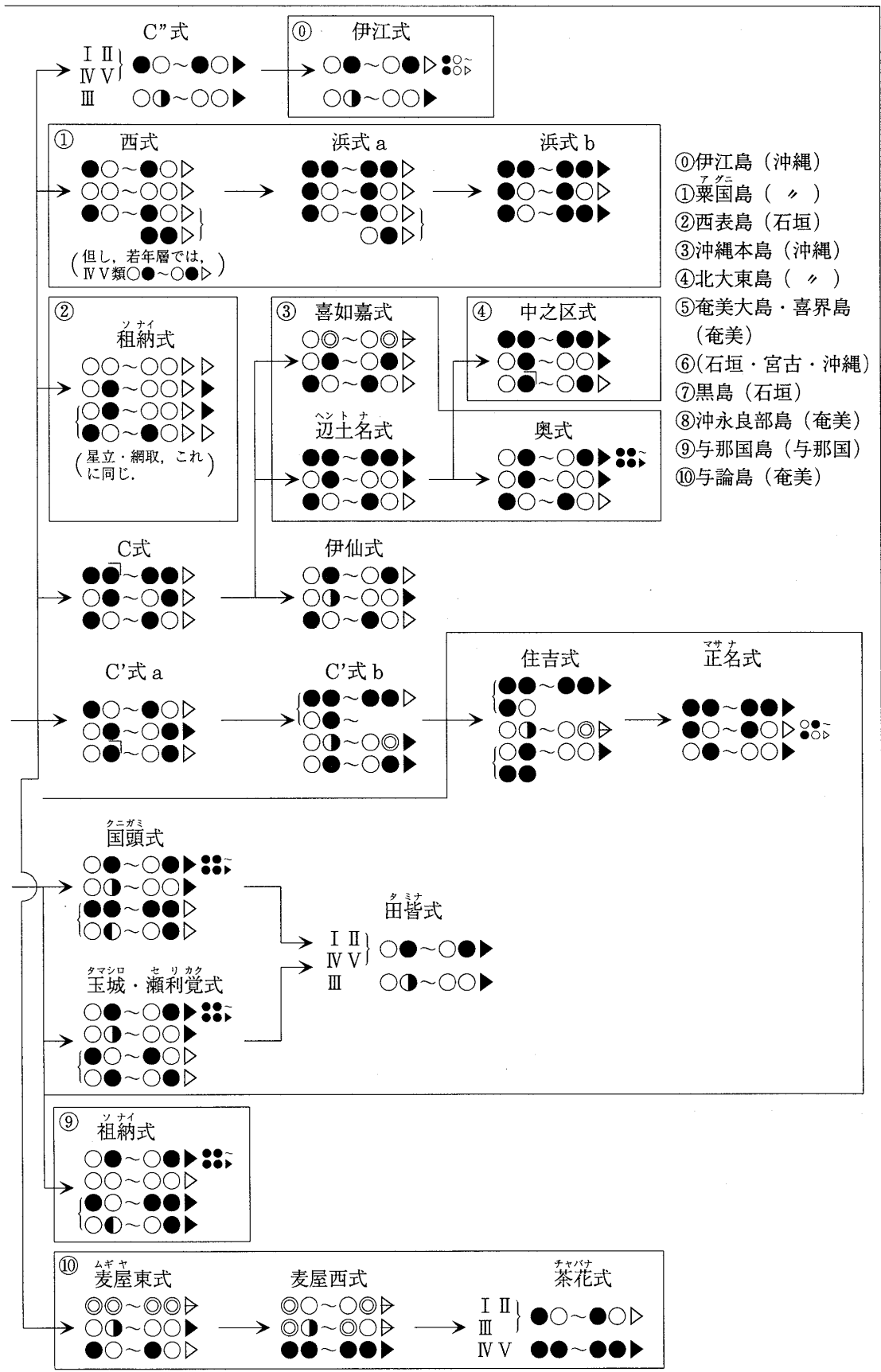
4. まとめ

4-1 以上、3つの問題を取り扱って来たが、それぞれの回答は各段に示した如くである。改めてその要約をしておけば次のようである。

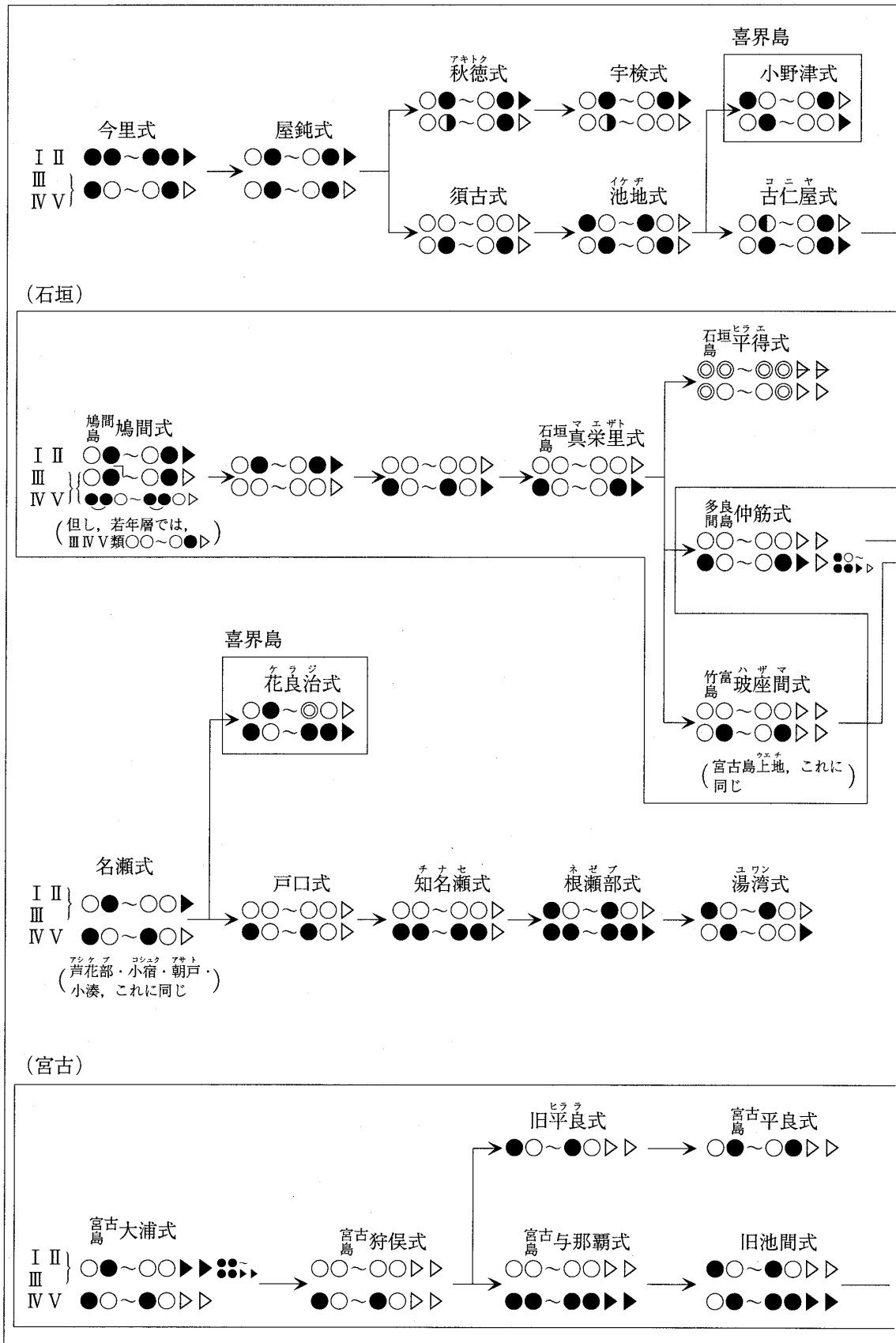
- 1) 琉球・九州西岸諸方言が経過した音調体系について。小松英雄氏の示されたような複雑な体系は両方言の場合には経過していないのではないか。基本的には3型を祖型と

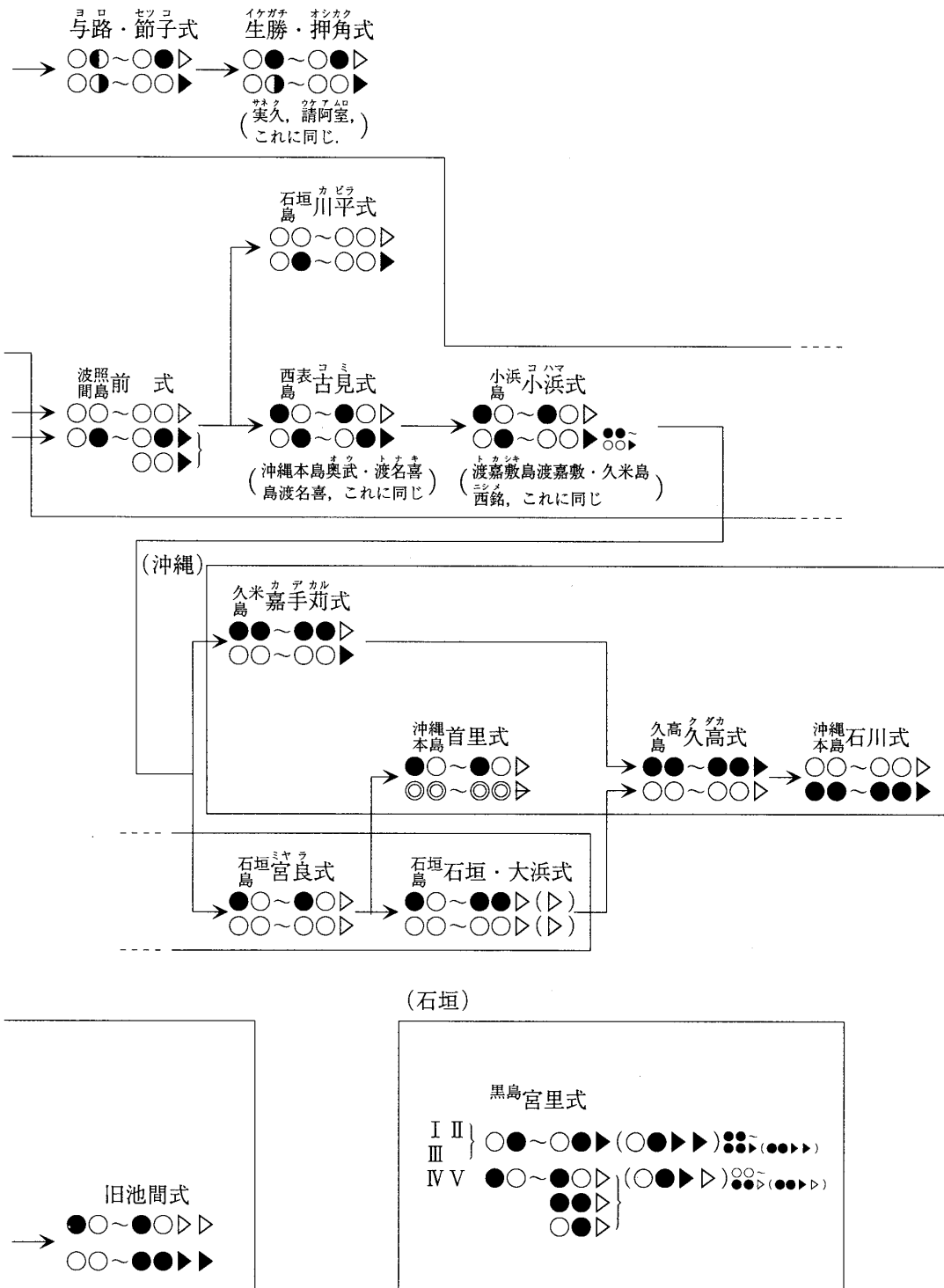
〈図1〉



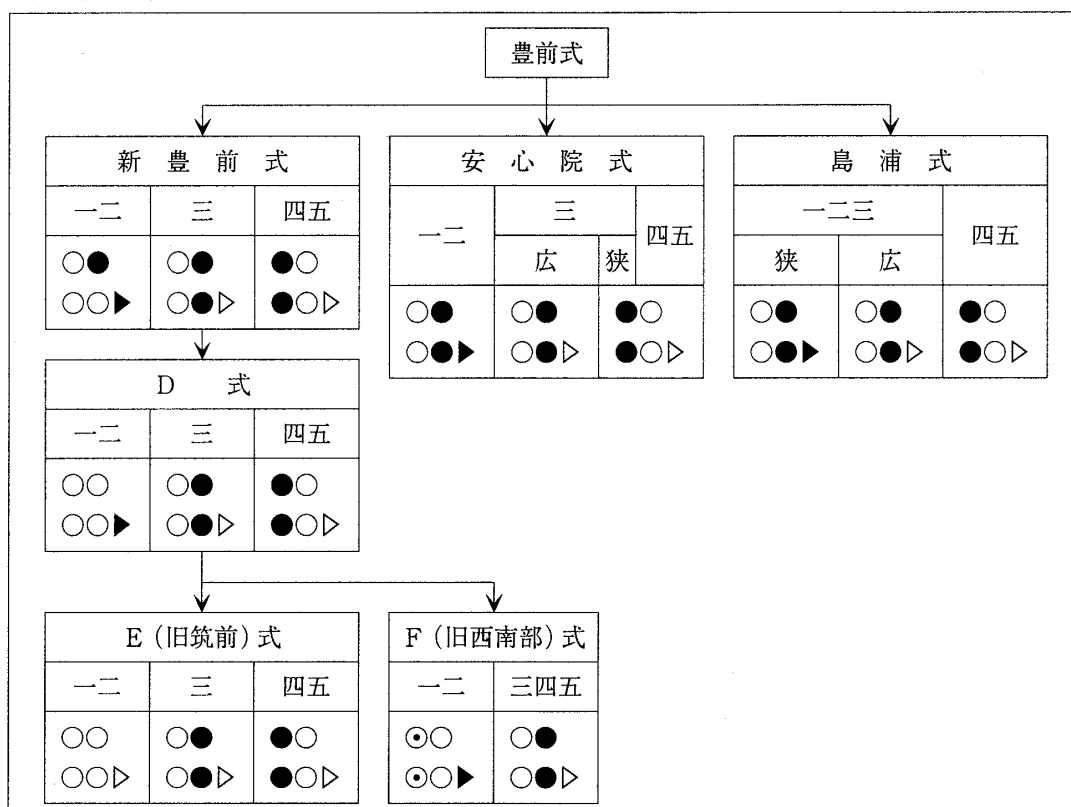


〈図2〉





〈図3〉 豊前式から諸方言への展開



(注) 安心院式—豊前宇佐郡一部。

島浦式—日向北部の離島 島野浦島。

広・狭は、それぞれ第2音節広母音語・狭母音語を示す。

鹿児島式—鹿児島県主流。

長崎式—長崎県主流。

鹿島式—鹿島市・藤津郡など佐賀県南部。

武雄式—武雄市・杵島郡等佐賀県中部，玉名郡等肥後北部。

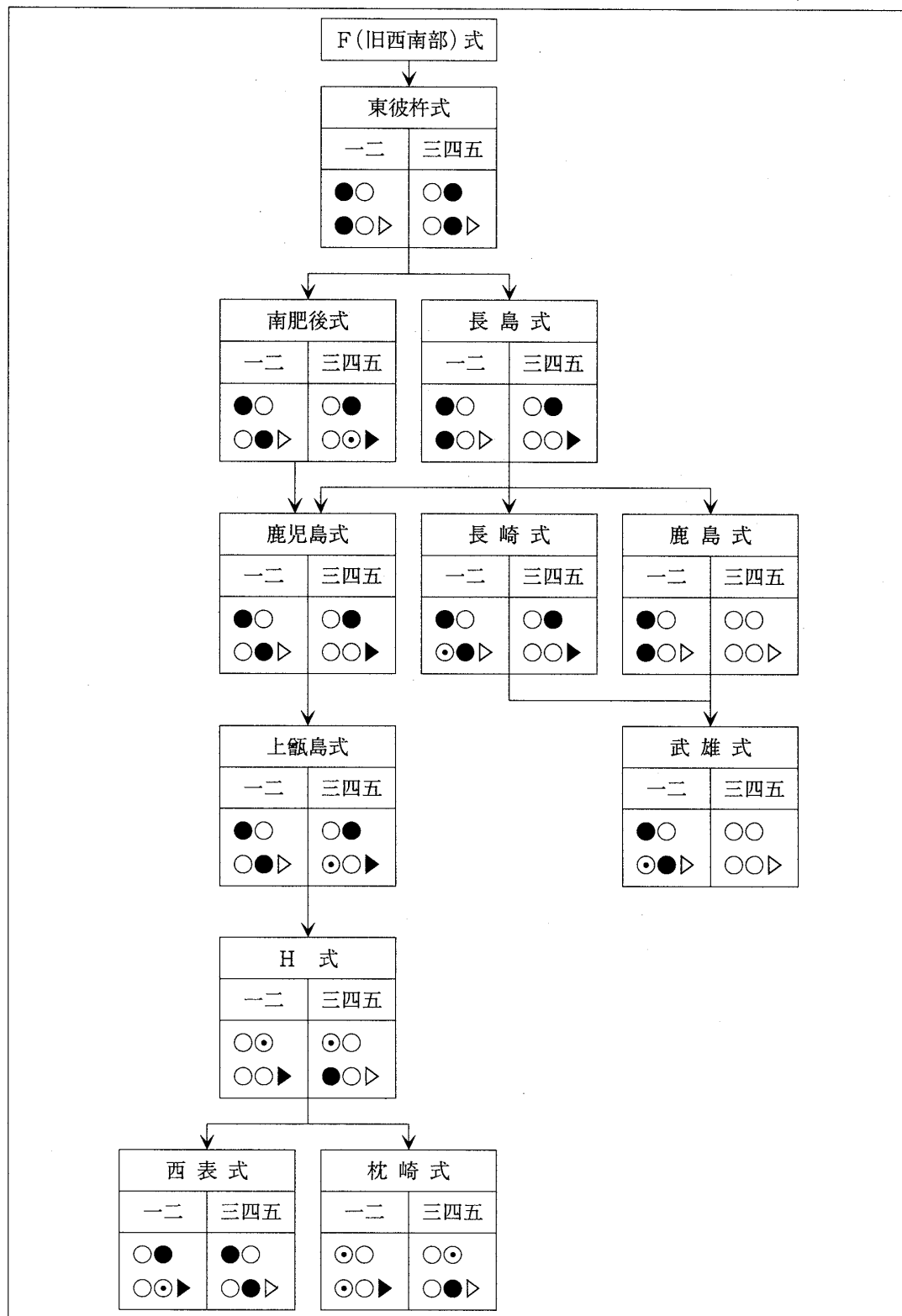
上飯島式—上飯島一部，南薩摩一部。

枕崎式—薩南枕崎地方など。

西表式—種子島西表等。

※ 図3・4については奥村三雄1990を参照した。

〈図4〉 西南部式諸方言アクセントの系譜



(注) 東彼杵式—肥前の東彼杵郡西北部(三河内等), 屋久島一部等。

長島式—薩摩出水郡長島等。

南肥後式—葦北郡大部分, 八代郡・球磨郡各一部等。(前頁下部に続く)

し、せいぜいたどり着いて5型のいわゆる名義抄式体系ではないか。

- 2) 両方言が落ち着こうとしている音調体系について。いわゆる名義抄式の高起式の語を高起式に、低起式の語を低起式にしようとする音調体系である。
- 3) 両方言の区画をめぐって。両方言には、従來說かれて来た巨大な方言区画線を越えるような根深い共通性(3型を祖型とする語声調体系を持つ)が認められる。その背景には、非常に古い時代からの人や文化の交流の歴史が有る。

以上。

【引用文献】

- 奥村三雄 1990 『方言国語史研究』
国立国語研究所 1963 『沖縄語辞典』
小松英雄 1971 『日本声調史論考』
崎村弘文 2006 『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』
徳川宗賢 1962 「日本語諸方言のアクセントの系譜」 試論—「類の統合」と「地理的分布」から見る—(『学習院大学国語国文学会誌』6)
McCawley, J.D. 1972 「Towards a Family Tree for Accent in Japanese Dialects」
(『Papers in Japanese Linguistics』Vol.1,2)